

西洋中・近世における巨人表象とイマジネール ——聖人・野人・パタゴニア人——

黒川正剛
太成学院大学

要旨

巨人の実在は、ヨーロッパのキリスト教社会において中世・近世を通して信じられてきた。巨人は「イマジネール（想像界）」の存在である。イマジネールは妄想や幻影ではなく、人々の意識に影響を与える「現実」である。

十四救難聖人の一人として有名な聖クリストフォルスは3世紀に実在したとされる聖人であり、聖人伝や絵画において巨人として表象された。その名前は、キリスト教への改宗前にキリストを背負って渡河したことに由来する。聖クリストフォルスは改宗後、宣教の途上で奇蹟を起こした聖なる巨人であった。また聖クリストフォルスは犬頭の巨人としても描写された。古代以来、犬頭種族は驚異の範疇に含まれる異形の異人種であった。中世の時代、聖クリストフォルス崇敬は熱心に行われていたが、近世以降、崇敬は批判されて退潮した。聖クリストフォルスは奇蹟・驚異の世界と現実界の境に立つ聖なる巨人であり、時代の流れの中で飼い慣らされた巨人なのである。

野人は全身毛むくじらの生き物であり、中世以来、彫刻・絵画や文学作品において造形された。その姿形は巨人として表象されることがある。彼らは森に棲息する悪魔的な存在として考えられていた。また性格は獰猛かつ淫猥であった。しかし野人は中世末から近世にかけて家庭生活を営む平和的な存在に変化し、かつての獰猛さを失っていく。森という驚異の世界と現実界の狭間に棲む野人も、聖クリストフォルスと同様に、時代の経過の中で飼い慣らされた巨人である。

パタゴニア人は16世紀の南アメリカ大陸で発見されたと信じられていた巨人である。マゼランの世界周航に同行したピガフェッタによる航海記の記述からパタゴニア人巨人説はヨーロッパ中に広がった。パタゴニア人は驚異の地である南アメリカ大陸という非ヨーロッパ世界に棲む異形の異人種であった。しかし啓蒙主義の時代である18世紀に入ると、近代的な合理主義に基づいた認識によってパタゴニア人巨人説は否定された。『百科全書』の「巨人」項目の説明は、パタゴニア人を含む巨人の実在について懐疑的である。また、探検家ブーガンヴィルの実際の観察に基づくパタゴニア人描写は客観的であり、パタゴニア人巨人説を否定するに十分であった。パタゴニア人もまた、近世末に飼い慣らされていったのである。

イマジネールの存在としての巨人は、このような飼い慣らしを経て、現代の漫画やアニ

メの巨人につながっているのだ。

キーワード

巨人、イマジネール（想像界）、聖クリストフォルス、野人（ワイルド・マン）、パタゴニア人

Representation of Giants and *Imaginaire* in Medieval and Early Modern Europe: Saints, Wild Men and Patagonians

Masatake KUROKAWA
Taisei Gakuin University

Abstract

The existence of giants was believed in Christian society in Europe throughout the Middle Ages and early modern times. Giants are the beings of “*imaginaire*”— not a fantasy or an illusion, but a “reality” which influences human consciousness.

St. Christopher, who is famous as one of the Fourteen Holy Helpers, was a saint who existed in the third century. He was represented as a giant in hagiographies and paintings. His name is derived from the fact that he crossed the river carrying Christ on his back before his conversion. Thereafter, he worked miracles in missionary activities, thereby making it possible to call him a holy giant. Then, he was represented as the dog-head giant (Cynocephalus). The Cynocephali were a strange-looking race from ancient times, which belonged to the category of wonders. St. Christopher had been venerated eagerly in the Middle Ages, but the veneration was criticized and declined in early modern times. He is the holy giant who stands on the border between the miracle/wonder world and the real world, and the domesticated giant over time.

The wild men were hairy creatures. They had been depicted in sculptures, paintings, and literature since the Middle Ages and they were often represented as giants. It was believed that they lived in the forest and were demonic beings. Moreover, they were characteristically ferocious and coarse but they had been transformed into peaceful creatures living a family life and had lost their ferocity by the end of the Middle Ages and into early modern times. The wild men who lived on the border

between the forest, that is, the wonder world, and the real world were domesticated giants similar to St. Christopher.

The Patagonians were giants who were believed to have been discovered on the South American continent in the sixteenth century. The Patagonian giant theory had been disseminated throughout Europe by the logbooks kept by Pigafetta, who accompanied Magellan in his circumnavigation of the globe. The Patagonians were a strange-looking race that lived in the non-European world, that is, the South American continent, conceived of as a wonderful land. However, in the eighteenth century, the age of the Enlightenment, the Patagonian giant theory was denied by the recognition based on modern rationalism. The headword “GÉANT” in the *Encyclopédie* takes a skeptical view of the existence of giants. Besides, the descriptions of the Patagonians based on the real observation by Bougainville were objective, therefore, people could deny the Patagonian giant theory thoroughly. The Patagonians, likewise, had been domesticated at the end of early modern times.

The giants as the beings of *imaginaire* are related to the giants of the *mangas* and the animated cartoons of our day.

Keywords

Giants, imaginaire, St. Christopher, Wild Men, Patagonians

1. はじめに

「他の人間の普通の身長と比べて並外れた身長を持つ人間。巨人の实在の問題はしばしば検討されてきた」¹。

これは18世紀のフランスでディドロとダランベールの監修のもと刊行された『百科全書』における「巨人 (GÉANT)」の項目の冒頭の記述である。執筆者は『百科全書』の全6万8千項目中の約25%にあたる1万7千の項目の記事を手がけ、ディドロをして親愛の情から『百科全書』の奴隷」と言わしめたルイ・ド・ジョクールだ²。

客観的な筆致によるこの記述は、理性と合理的な思考を重視する18世紀のヨーロッパの啓蒙主義の時代に生きるド・ジョクールが、巨人の实在について冷徹に観察していることをうかがわせる。ド・ジョクールの具体的な巨人論については後ほど検討することにして、ここで確認しておきたいのは、18世紀に至るまで西洋世界では巨人の实在が真剣な議論の対象になってきたということである。巨人という存在に向き合う、このような眼差しは必然的に歴史研究における「イマジネール (想像界)」の領野に我々を導く。

「イマジネール=想像界」とは何か。『ヨーロッパ中世の想像界』において池上俊一は次のように述べている。

想像界は現実界の生まれてくる母胎である。一見支離滅裂な妄想、幻影のように見えても、それぞれのイメージには、それが生まれ育ち流布していくための時代と地域に特有の要因があるのであり、そこで各イメージが担う意味と価値が備給されているのである³。

さらに池上は別の著書でこうも述べている。

イマジネールは知覚された世界と異なり、意識による明晰な現実把握でなく、さらにいえば、現実世界に何らかの直接的支柱をもたない。にもかかわらず、それは、意識に「現実的」な影響力を及ぼす《現実》であり、人間は半ば以上、イマジネールにどっぷり漬って生活しているのであるから、イマジネールの理解なしに歴史は理解不能なのである⁴。

現実には、「普通の身長と比べて並外れた身長を持つ人間」としての巨人が实在しないわけではない。疾病としての巨人症は、成長を促進するホルモンが過剰に分泌されることによって引き起こされ、全身が平均的な人間よりも著しく大きくなる。2メートル以上の身長が巨人症の基準とされている。しかし、本稿が対象とする巨人は、上述のイマジネール

との関わりの中で認識されるものだ。つまり、現実の世界というよりは「想像界」に属し、「妄想、幻影」のもとに捉えられるものであるにもかかわらず、人々の意識に現実の影響力を行使する「現実」としての巨人である。

このようなイマジネールに棲まう巨人として、本稿では聖クリストフォルス、野人（ワイルド・マン）、そしてパタゴニア人を取り上げ、これらの巨人表象を分析することを通して、西洋中・近世において巨人が棲息していた「場（トポス）」、換言すれば「立ち位置」を明らかにしたい。聖クリストフォルスはキリスト教の神と密接に関わる巨人として、野人は民間信仰に関わり、悪魔と結びつく巨人として、パタゴニア人は非ヨーロッパ世界に棲む異形の巨人として、その各々が西洋中・近世という「時代と地域に特有の」意味を担いつつ流布したものである。これらの巨人表象の具体相を探究することを通してキリスト教の一神教的世界における巨人表象の特質に迫ることができるだろう。以下、3つの巨人表象を順に検討していくことにしたい。

2. 聖クリストフォルス

聖クリストフォルスは3世紀に実在したとされる殉教者である。十四救難聖人の一人として数えられ、人々はその名を唱えることで水難等による突然死の回避や旅行の安全を祈願してきた。またその聖画像は教会の壁面に描かれるほか、護符として携帯されるなど現代においても非常に親しまれている聖人である⁵。その生涯については小アジアで死去したということ以外は不明である。しかし8世紀にはギリシア語とラテン語による彼の伝説が存在しており、その後内容が拡充され、13世紀にヤコブス・デ・ウォラギネが著した聖人伝『黄金伝説』の中で彼のイメージは完成した⁶。聖クリストフォルスは同書で次のように述べられている。

クリストフォルスは、洗礼を受けるまではレプロブスという名であったが、受洗後クリストフォルスと呼ばれるようになった。〈キリストをになう者〉という意味である。(…)クリストフォルスは、カナンの子民の出で、巨大な体軀といかつい面貌の持ち主で、身の丈は、12キュビトもあった⁷。

1キュビトは約45cmであるから、クリストフォルスは約5m半の身長だったということになる。紛うことなき巨人である。彼の名前が「罪を宣告された者」という意味のレプロブスから「キリストをになう者」を意味するクリストフォルスに変わった経緯は次の通りだ。

かねがねこの世で一番強い王に仕えたいと思っていた彼は、絶大な力を持つと言われていた王を探し出し、念願叶って警護役として採用された。しかし王は宮廷にやって来た楽

人が歌った曲中に悪魔の名が出てくる度ごとに額に十字の印を切った。その理由を問うレプロブスに、キリスト教徒の王は十字の印を切らないと悪魔に憑かれ破滅させられるかもしれないからだと答えた。これを聞いたレプロブスは王のもとを去り、悪魔を探し出しその家来となった。だがレプロブスと悪魔が街道を歩いているとき、道端に立つ十字架を見た悪魔は逃げ出してしまふ。レプロブスが悪魔にその理由を問うと、昔キリストという男が十字架にかけられたが、それ以来十字の印が恐ろしく逃げずにはいられないのだと答えた。

今度はキリスト探しに出かけたレプロブスは、一人の隠修士と出会った。隠修士はキリストの教えを説いて信仰を勧めたが、レプロブスは祈りの意味がわからないと拒絶する。そこで隠修士が提案したのが川守を務めることであつた。溺死者の多いある川で、その巨大な身体を活かして人々の渡河の手助けをしてやればキリストと出会えるであろうと云うのである。ある日、渡河を求める一人の子供を肩に乗せて川を渡っていると、次第に水嵩は増し、子供は鉛のように重くなった。歩みを進めれば進めるほど水位は高まり、重さも益々重くなって、ついにはレプロブスが命の危険を感じるほどになった。かろうじて岸に着いたレプロブスに子供は語る。自分はキリストであり、お前は世界自体のみならず世界の創造者を肩に乗せたのだと。渡河という行為を通して受洗したレプロブスは名をキリストフォルスに変え、その後布教活動に身を捧げ、殉教者として生を終えた⁸。

聖人一般がそうであるように、キリストフォルスも奇蹟と結びついた聖人である。子供姿のキリストはキリストフォルスに正体を明かしたあと、向こう岸に戻ったらキリストフォルスが使用していた杖を地面に植えるよう、そうすれば翌朝には杖が花を咲かせ実をつけるだろうと伝えて忽然と姿を消した。言われたとおり杖を植えると、果たしてその通りになった。また、布教の途上で迫害を受けているキリスト教徒を「主において」励ましていたとき、当地の裁判官から打擲された。しかしキリストフォルスは仕返しをするのではなく、杖を地面に突き刺し、神に対して人々を改宗させるため杖に緑の葉が繁茂するよう祈った。そうしたところ、その通りになり、この光景を見ていた8千人が改宗した⁹。

以上のような聖人伝を持つ聖キリストフォルスは人々の信仰心をかき立て、16世紀まで厚く崇敬された。しかしその崇敬熱は迷信と絢交になったものであり、宗教改革と反宗教改革を経て、プロテスタントとカトリックの両教会の改革者たちの嘲笑と批判的となった¹⁰。16世紀最大の人文主義者と言われるエラスムスは、その宗教的立場から新旧両派から攻撃された人物だが、『痴愚神礼賛』（1509年）の中で、聖キリストフォルス崇敬に浮かれる人々について次のように辛辣に批判している。

今様ポリュペモスと言はれる聖キリストフォルスの彫像なり畫像なりを拝んで置けば、その日は決して死ぬことはないといふ馬鹿げたしかし楽しい確信を抱き、さうと思ひこんでゐる連中（・・・）¹¹。

ポリュペモスは、ホメロスの『オデュッセイアー』に登場する隻眼の巨人の食人種キュクロプスの首長である。巨人を表象する際に古代ギリシアの巨人表象が想起されているわけである。ヨーロッパの巨人表象における古代ギリシアの伝統の重要性は大沼が明らかにしている通りである。14世紀以降、聖クリストフォールの図像イメージは具体化し、教会の壁画やステンドグラス等に造形されるほか、画家や版画家たちの作品として制作された¹²。ボッシュ、クラナハ（図1）、デューラー（図2）等の有名な画家たちも作品を手がけている。「視覚言語」としての聖人崇敬は近世の特徴であり¹³、絵画・版画や彫像などの視覚に訴える形で造形された巨人としての聖クリストフォールの表象が当時の人々に大きな影響を与えたであろうことは想像に難くない。エラスムスの言葉は宗教改革直前の時期のものだが、同じ調子の批判は新旧両教会にも踏襲され、聖クリストフォール崇敬は、17世紀以降衰退する¹⁴。

聖クリストフォールが巨人として表象されることについては、その出自であるカナンに関わる聖書の記述についてもふれておくべきであろう。この点については、本論集の他の論考でも度々言及されている。『旧約聖書』「民数記」には、モーセがイスラエルの諸族の長たちをカナンに偵察に遣わす場面が述べられている。偵察から帰った彼らはモーセ



図1 ルカス・クラナハ（父）作
『聖クリストフォール』1518-20年頃
デトロイト美術館蔵



図2 アルブレヒト・デューラー作
『聖クリストフォール』1521年
ナショナル・ギャラリー・オブ・アート蔵



図3 塔の間に立つ巨人としての犬頭の聖クリストフォルス (12世紀)
ヴュルテンベルク州立図書館蔵
Bildindex der Kunst & Architektur
(access: 2022/04/06) <https://www.bildindex.de/document/obj00043083?part=65>

ることしかできなかつた。あるとき、彼は「人間の言葉を授けることで神の力を示してほしいと神に願った」。その結果、神が遣わした天使が彼の口を叩いてギリシア語を話せるようになった。その後も神を信仰しなかつた彼が、子供姿のキリストを背負って渡河することを通してキリスト教に改宗し、布教活動に邁進して最後に殉教する経緯は、すでに『黄金伝説』で確認した内容とほぼ同じである。また、改宗した途端、肌の色はミルクのように白くなったという。犬頭人種族としての聖クリストフォルス表象は、750年頃にイングランドで編集された『古英語殉教伝』の記述に見られるように¹⁹、カトリック教会の領域においても例は少ないものの確認できる²⁰。

犬頭人種族(キュノケファルス)はヨーロッパにおいて古代ギリシア・ローマ時代以来、連綿と受け継がれてきた「驚異」の世界に属する代表的な怪物的異人種表象であることを考えると、聖クリストフォルスは「奇蹟」のみならず「驚異」とも結びついた聖人であると言えるだろう。また聖クリストフォルスと犬頭人種が重ね合わせて認識されたことについては、語源的な問題が関わっていることも附言しておこう。聖クリストフォルスが生まれた「カナン」は中世のラテン語表記では *terra Chananea*、そして犬は *canis* と表記される。このような語形上の類似性から、中世においてラテン語が俗ラテン語化するなかでカナン人 (*caninea*) と犬 (*canis*)、そして「ドッグマン (犬頭人)」が同じ意味に

に次のように報告する。「偵察して来た土地は、そこに住み着こうとする者を食い尽くすような土地」であり、「我々が見た民は皆、巨人」であった。「そこで我々が見たのは、ネフィリム」であり、「我々は、自分がいなごのように小さく見えた」と(『民数記』13:32-33)¹⁵。ネフィリムは『創世記』(6:4)で言及されている太古の巨人族である¹⁶。聖書の記述に基づけば、聖クリストフォルスはカナン出身であるがゆえに巨人なのだ。

さて、聖クリストフォルスの表象については、東方正教会の聖者伝やイコンに伝わるものも見ておく必要がある。「犬頭人種族の巨人」としての聖クリストフォルスである(図3)¹⁷。巨人としての犬頭人については大沼も言及している。

その伝承には様々なヴァリエーションがあるが、要約すると次のようになる¹⁸。もとレプロブスという名であった聖クリストフォルスは、カナンの地に住む犬頭人種族の巨人であった。肌は黒く、犷猛で恐ろしい容姿をしており、人間の肉を食べ、言葉は話せず吠える

なったという²¹。

これまで述べてきたことから、聖クリストフォールの「トポス（立ち位置）」をまとめておきたい。第一に、クリストフォールは聖人であり、キリスト教を信仰する人々に祝福をもたらす存在である。したがって、それは「善き、我らキリスト教徒のための、聖なる巨人」である²²。第二に、この巨人は受洗を通してレプロブスからクリストフォールに変化する過程で獐猛な巨人からキリスト教信仰に従順な巨人となった。加えて近世以降は、中世における崇敬熱は抑圧され、かつての「威力」を弱体化させた。いわば聖クリストフォールは時の流れの中で「飼いならされた」聖なる巨人なのだ。第三に、聖クリストフォールは存命中は日常の世界に実在した存在でありながら奇蹟を起こし、死後は崇敬の対象として奇蹟の世界に関わる一方、犬頭人種として表象されることで驚異の世界とも関わっていた。奇蹟と驚異は隣接概念だが、聖クリストフォールという巨人は、「日常の世界」と「奇蹟／驚異の世界」の境界に棲まう存在なのである。

3. 野人（ワイルド・マン）

野人は、中世のアーサー王物語や吟遊詩人の朗唱する詩などの文学的作品に登場するほか、彫刻の対象となったり、タペストリーや騎士が使用する乗馬用鞍や武具の装飾として造形された。また近世には、デューラー（図4）やブリュゲルなどの画家が絵画や版画で、またセルバンテスやスペンサーが文学的作品の中で取り上げるなど²³、人気のあるテーマであった。野人は、中・近世のヨーロッパの想像界に棲む「想像上の生き物 *imaginary creatures*」である²⁴。

野人は次のような身体的特徴を持つと考えられていた。肉体的な姿形はあくまで人間である。しかし野人と人間を分かつ特筆すべき一つの特徴がある。それは顔面・両手・両足・両肘・両膝を除いて全身を覆う豊かな体毛である。女性の野人の毛髪はことのほか長く、両乳房は無毛である。二足歩行するが、ときに四つ足で歩く。野人は片手で木の根を引き抜くことができるほど怪力の持ち主であり、棍棒や木の幹を振り回す。身体の大きさは、一般的に人間とほぼ同じだが、しばしば「巨人」もしくは反対に小人として描写される



図4 デューラー作『紋章入り楯を持つ野人』1499年
アルテ・ピナコテーク蔵



図5 マイスター bxg 作『野人の家族』
1470-90年
バルトラ『野蛮なる西洋の発見』、18頁。

こともある。一般的に肌の色は白く、アジアやアフリカに棲む異人種ではなく、ヨーロッパ人の「人種的特徴」を持つ存在として認識されていた。また、家族生活を営むとも考えられていた(図5)²⁵。

野人の祖型的な存在はすでに古代ギリシア時代に見出すことができる。すでに紀元前5世紀には野人は「複雑ではあるがよく構築されたステレオタイプとして具体化されていた」²⁶。そのステレオタイプには、たとえばサテュロス(山羊の耳・角・脚を持つ半人半獣の山野の精霊)、ケンタウロス(上半身は人間、下半身が馬の姿の怪物種族)、シレノス(上半身は毛深い人間の姿で、馬の耳、脚、尾を持つ山野の精霊)、ギガンテス(天の神ウラノスの血と大地の女神ガイアから生まれた巨人族)、そして前述した一つ目の巨人キュクロプスも含まれる²⁷。野人が全て巨人とみなされるわけではないが、古代ギリシア時代より、野人は巨人の属性を持つ存在として認識され

ていたのである。

中世に入ると、野人は文学的作品、民間伝承、図像等における重要な存在として取り上げられるようになり、その描写も定型化していく。12世紀には毛むくじゃらの野生の人間というステレオタイプが図像表現において確立し、野人を表わすラテン語表記であるホモ・シルヴァティクス(homo sylvaticus 森の人)、ホモ・アグレスティス(homo agrestis 野生の人)という言葉も定着していった²⁸。ヨーロッパ史における野人研究で著名なR・バーンハイマーとR・バルトラがともに認めているように、中世の作家たちは、「一般的に野人の存在の神学的な説明を避けることを好み、社会的・心理学的な言葉で野人を描写する傾向にあった」。すなわち、野人は「その嘆かわしい有り様において、神の被造物ではなく、狂気、孤独、もしくは彼が被った艱難辛苦のためにこの獣の状態に『堕ちてしまった』やつ(creature)であろう」と考えたのである²⁹。しかしながら、中世の想像界から野人という生き物が実在するという考え方を消し去ることはできなかった³⁰。

このような野人に関する考え方を示す例をいくつか見ておこう。まず人間が不幸に直面して絶望し、狂気に陥り野人になるパターンである。14世紀のフランスで著された『李の賦』(作者不詳)という詩では、ある貴婦人の愛を射止めようとした主人公の騎士ジャ

ンが、四度目の求愛のとき貴婦人から夫がいるため求めに答えることはできないと告げられ、絶望して野人になる様が描かれている。「絶望の淵に投げこまれたジャンは森の奥深くに分け入り、衣服を引き裂き（・・・）野人の生活を送」った。団栗等の木の実と草の種を食べながら七年間生活し、身体は「熊のように毛むくじやら」になった。野人となったジャンは大木を持つことができるほど怪力であった³¹。

次に野人を実在する生き物としてみなすパターンである。12世紀のフランスの詩人クレチアン・ド・トロアの『イヴァンまたは獅子を連れた騎士』に登場する野人は、「馬か他の獣のよりも大きい頭をもち、髪はぼうぼうの蓬髪で、禿げあがった額は手二つの広さがあり、耳は象の耳のように巨大で苔むして、おまけに巨大な眉、扁平な顔、梟の目、猫の鼻、狼のように裂けた口」をしており、「大きな棍棒を手に」持っていた³²。この野人は巨人である。また、13世紀初頭のウェールズ古譚『オウエインまたは泉の淑女の物語』に登場する野人は隻眼の一本足の巨人である。この野人は自ら「自分が大きいこと」を登場人物のアーサー王の廷臣キノンに語るが、「まったく彼が言う以上に大きかった。大のおとなが二人がかりで運ぶほどの重さだと聞いていた鉄の棍棒は、明らかに四人がかりでないと持ち上げられないように」思えた³³。

巨人としての野人は図像においても確認できる。ドイツの画家ブルクマイアーが制作した「森の戦い」（1500–1503年頃）には騎士と戦う野人が描かれている（図6）³⁴。木の幹を両手で握り締める野人の背丈は、甲冑を身にまとって剣を振り上げる騎士の二倍はあるだろう。その獐猛さは地面に打ち倒されて横たわる数人の騎士の姿から明白である。

野人は食人種と結びつけられることもあった。早くは3世紀に著された伝カリステネスの『アレクサンドロス大王物語』の中に、アレクサンドロス大王が東方遠征中に遭遇した野人の記述がある。それは「体のすべての部分が毛に覆われた、巨大な身の丈の男」であり、捕獲後、「裸の女を奴にあてがう」と、「女をさっと奪い取るや、奴はそれをがつつ食べだした」³⁵。また16世紀のスペンサー作『妖精の女王』には、人間に「形が似ているだけで、それに身の丈も一スパン [約23cm] だけ高く、一面に毛で覆われて」いる「未開の野蛮



図6 ハンス・ブルクマイアー作『森の戦い』1500-03年頃
ナショナル・ギャラリー蔵

人」が登場する。この野人の「大きく開いた口からは巨大な歯がむき出して」おり、「さ
らったり盗んだりして来た人間や獣だけを常食とし、生き血をすすっていた」³⁶。

また野人には性的放逸という特徴がある。野人はエロチックな熱情に突き上げられて人
間の異性を誘拐し、森に連れ去り、自分の伴侶として一緒に暮らすと信じられていた。男
の野人は人間の女性を、女の野人は人間の男性を性的な衝動に駆られて誘拐するのであ
る³⁷。

以上のような特徴を持つ野人は、聖クリストフォルスと異なり、神ではなく悪魔と親近
性を持つ存在として認識されていたと言えるであろう。確かに、『森と悪魔—中世・ルネ
サンスの闇の系譜学』において伊藤進がH・ホワイトの論考に基づいて述べているよう
に、「野人はあくまで人間が動物の状態に退行したもの」であり、「悪魔ないし魔女は邪悪
な霊ないし悪霊の力を賦与された存在」であって「野人と悪魔にははっきりとした相違が
存在する」のだが、例えば西洋中・近世の人々が、15世紀末に出版された魔女狩りの手
引書『魔女に与える鉄槌』（1486年）に見るように、「野人に悪魔との結びつきを認めよ
うとした」のも確かなのである³⁸。

『魔女に与える鉄槌』第1部第3問は悪霊であるインクブス（男夢魔）とスックブス
（女夢魔）が人間との性交により人間を出産できるかどうかを論じた部分だが、そこに以
下のような記述がある。まず、この問題に対する答えは、「インクブスとスックブスの悪
霊ども（incubos et succubos demones）を通して人間が時々生み出されると主張するこ
とはきわめて正統であり」³⁹、聖人の言葉や聖書の伝統にも合致したことである。そして
アウグスティヌスの『神の国』などを引用しながらこう述べる。

民衆がインクブスと名づけるシルヴァヌスやファウヌス（・・・）は女たちに節度がな
く、女たちと交わることを熱望し成し遂げるのだ。ガリア人たちがドウシイと呼ぶあ
る種の悪霊どもが始終この破廉恥な行為を熱望し遂行するということは（・・・）多く
の人々が断言している⁴⁰。

シルヴァヌスは古代ローマ神話の森と荒野の神、ファウヌスも古代ローマの森や家畜の神
であり、古代ギリシア神話のサテュロスと同一視された。いずれも野人表象の原型であ
る。

さらに『旧約聖書』「イザヤ書」（13:21）の記述に関して次のように言う。

『駝鳥がそこに住み、毛深い者ども（pilosos）がそこで踊るだろう』。——ここでは
『毛深い者ども』（pilosos）として『悪霊ども』（demones）を想起せよ——それゆ
えに註解は述べている。『毛深い者ども』は森の人であり（“Pilosos” sunt siluestres
homines）、インクブスあるいはサテュロス、ある種の悪霊ども（demonum）である

と⁴¹。

悪霊・悪魔である夢魔が、「森の人」すなわち野人と同一視されているのだ。中世末の想像界では野人と悪魔は同じ範疇のもとで捉えられていたのである。バルトラも、野人と異教の神々、換言すれば、キリスト教の観点から見ると「悪霊ども」に関する図像学的な肉体表現（体毛や山羊的な外見）に着目し、中世において両者が同一視されていたことにふれている。バルトラが挙げているのは、サテュロスやファウヌウスのほかケルトの野生の神ケルヌノスである⁴²。また、ゲルマンの民間信仰においても、テュルストを始めとする巨大な体軀を持つ野人的存在が信じられていたことを忘れてはならない。ドイツの民俗学者 W-E・ポイカートによれば、それらは「ローカルな森のデーモン」である⁴³。

『魔女に与える鉄槌』が巨人そのものを悪魔と関連づけていたことを補足しておこう。先述と同様、夢魔について述べた第1部第3問においてインクブスが実在することを主張するため、次のように述べている。

人によってではなく、女たちに節度のない天使たちもしくはある種の悪霊ども (demonibus) によって、このような人間すなわち巨人たち (gigantes) がもうけられたことは信じられないことではない⁴⁴。

断るまでもなく、この箇所は、『旧約聖書』「創世記」(6:4) で言及されている、神の子が人間の娘たちに産ませた巨人ネフィリムのことである。巨人を産ませたのは墮天使すなわち悪霊なのだ⁴⁵。

さて、野人の棲息する場所（トポス）は森である。池上俊一が述べるように、中世において、森は異教の神々や妖精が棲む異界の領域として、すなわち「世俗の秩序とは別種の秩序が支配し、権力関係、社会的結合関係、経済システムなどすべての価値観が、世俗とは逆転する神秘的な空間だと見なされていた」⁴⁶。12・13世紀に、森は「驚異」の世界としても認識されるようになる⁴⁷。また野人は驚異の世界の住人でもある⁴⁸。ただし、野人は人間が住む世界と断絶して生活しているのではない。異性の人間を誘拐する行動にも見られるように、野人は人間社会に常に出現する可能性がある境界的な存在である⁴⁹。

中世末期に近づくにつれ、野人は次第に飼い慣らされていく。15・16世紀に制作された野人をモチーフにしたタペストリー、彫刻、絵画などには平和な家庭生活を送る野人が頻繁に描かれるようになった。そのような図像を手がけた版画家・画家としてジョンガウワー、ブルディション、マイスター bxg (図5)、ショウフェーラインなどを挙げることができる⁵⁰。また、中世末から近世にかけて、野人はカーニバルの出し物としても好評を博した⁵¹。ブリューゲル (父) の原画に基づく木版画「謝肉祭と四旬節の戦い」(1566年)には、棍棒を担いで腰に手を当てコミカルな動作をする野人が描かれている (図7)。

この出し物で野人は劇的な身振りをして叫び声をあげながら人間に打ち倒される。その様子は冬の終わりと春の始まりを表現するものとされる⁵²。このような野人からは獐猛さは剥奪されている。その背丈は巨人のそれではない。飼い慣らしの過程で野人の背丈は通常の間人サイズに縮小されてしまったというのは言いすぎであろうか。



図7 ブリュエグел(父)原画『謝肉祭と四旬節の戦い』1566年
Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.130.

野人の「トpos(立ち位置)」をまとめておこう。第一に、姿形は人間には似てはいるが、豊かな体毛、獐猛さ、淫猥さ、ときに巨大な体軀を特徴とする野人は異形の存在であり、悪魔と親近性を持つ存在でもあった。第二に、野人は中世末から近世にかけて獐猛さを奪われ、平和的で家庭的な存在、また民衆文化のカーニバルの出し物へと変貌していく。時代の移り変わりの中で野人は飼い慣らされたのである。第三に、野人は森という異界、驚異の世界の住人であり、ときに人間の世界に侵入してくる境界的存在として認識されていたのである。

4. パタゴニア人

15世紀末に始まった大航海時代において、「新大陸」アメリカに向かったヨーロッパ人たちは未知の様々な「間人的存在」に遭遇した。その姿形はヨーロッパ人がヨーロッパから持ち込んだ驚異に関わる情報と現地で手に入れた真偽入り交じる情報を組み合わせて造形したものであった。それはまさしく想像界の生き物と言ってよい。たとえばコロンブスの1492年11月4日付けの航海誌には次のような記述がある。

さらにここからは遠いが、一つ目の人間や、犬のような鼻面をしていて、人を喰らう人間がおり、人をつかまえるとすぐに首を切り、血を吸い、生殖器を切り落とすといっているように解せた⁵³。

キューバ島のインディオがコロンブスたちに語る言葉を、現地語がわからないままヨーロッパの解釈枠に当てはめて理解している例である。「一つ目の人間」は巨人キュクロブ

スを想起させる。隻眼の人種、犬頭人種、食人種はいずれも古代ギリシア時代以来、ヨーロッパ世界で連綿として受け継がれてきた驚異の世界の住人である。そしてほかならぬ巨人もまた驚異の地アメリカで「発見」されたのだった⁵⁴。

早くは南アメリカを探検し、この土地が「新大陸」であることを主張したヴェスプッチが、1499年から1500年にかけて行われた第2回目の航海の中でベネズエラ沿岸の島に巨人が住んでいたとの記述を残している。この島はクラサオ島だと想定されるが、この島に上陸したヴェスプッチは次のように述べている。

[浜辺の] 砂のうえにすごく大きな足跡を発見しました。この足跡の寸法にからだのほかの部分も釣り合っているならば、じつに巨大な人間ということになりましょう⁵⁵ ([] は筆者による補足、以下同様)。

水を求めて島を探検するヴェスプッチ一行は粗末な小屋に女5人(老婆2人、娘3人)が住んでいるのを発見するが、彼女たちの背の高さは「哑然として見つめ」るほどであり、「[ヨーロッパの] 大男よりも背が高」かった⁵⁶。そうこうしているうちに「36人ほどの男が[小屋の] 入口からはいつてきた」が、「かれらは女よりもさらにずっと背が高く、じつに堂々たる体軀であり」、「まことに見とれてしまうほど」だったという⁵⁷。ヴェスプッチたちの巨人に対する印象は、「あまりに無気味であり」、「こいつらと出くわすくらいなら船に残っていた方がよかったとおも」うくらいであった⁵⁸。男の巨人たちは大きな弓矢と棍棒を持ち、「われわれに襲いかかろうとしている」様子に見えたため、ヴェスプッチたちは船に戻ることにした⁵⁹。ところが巨人たちは一定の距離をあけてついてくる。ヴェスプッチたちが岸を離れるや否や巨人たちは多くの矢を射かけてきたが、一行は無事に島から脱出した。ヴェスプッチはこう締めくくる。

かれらは他の部族とおなじく全裸でした。かれらの身長の大いことから、私はこの島を「イソラ・デ・ジカンテイ 巨人の島」[イスラ・デ・ロス・ヒガンテス] と呼ぶことにいたします⁶⁰ ([] は引用元の通り)。

ヴェスプッチが報告するこの巨人種族以上に、アメリカに棲む巨人種族の典型として18世紀に至るまで信じられ続けたのが「パタゴニア人」である。

1519年から22年にかけて行われたマゼランの世界周航に参加したピガフェッタはその航海記で次のように述べている。

われわれは南緯49度まで達した。[1519～20年の] 冬になったので、船隊は越冬するために格好の港へはいった(…)ある日、思いがけずに、まるで巨人のように

大きな男を見つけた。その男は裸で港の浜辺にいて、踊ったり歌ったり、そして頭から粉をかぶっていた⁶¹。

南緯 49 度に位置するのは、南アメリカ・アルゼンチン南部に位置するパタゴニア地方の付近である。さらにピガフェッタは続ける。

この男の背の高いことと云ったら、われわれはかれの腰までしかとどかなかった。体つきは均整がとれていて。顔は大きく、赤く塗っており、目のまわりは黄色に塗り、左右両方の頬の真ん中にはそれぞれ心臓の形を描いていた。(…) 巨人は (…)
この動物の毛皮でつくった履物をはいており、それは靴のように足にかぶさっていた⁶²。

ここで巨人と言及されているのは、現在のアルゼンチンのリオ・ネグロ地方からマゼラン海峡付近までの地域に住んでいた漂泊の狩猟採集民テウエルチェ族のことであり、動物はラクダ科の哺乳類グアナコのことである⁶³。グアナコの毛皮製の履物はパタゴニア人の足を大きく見せ、これがパタゴニア人は巨人であるとの説の一つの根拠となったとも言う⁶⁴。果たして現実にテウエルチェ族がヨーロッパ人男性の身長の数倍ほどの背丈を持つ巨人であったのかどうか定かでないが、「パタゴニア人巨人説」はその後のヨーロッパにおいて広く受容されていく。

ところでパタゴニアという名称については、マゼランがこの土地に住む人々を「パタゴノ」と名づけたことに由来するが⁶⁵、マゼランによるこの名称の使用は 16 世紀初めに出版されたスペインの騎士道物語『プリマレオン』(1512 年)に関係していると言われている。物語の中に出てくるある島には、獣皮をまとった野人と「パタゴン」という生き物が棲んでいる。パタゴンは獣姦から産まれた巨大な生き物で、犬頭と雄鹿の脚を持つ怪物である⁶⁶。マゼランが名付けた「パタゴニア人」はピガフェッタの航海記の記述を通してその姿形の怪物性を増幅させながらヨーロッパに流入していった。ただ、パタゴニア人が『プリマレオン』の描写そのままに表象されることはなく、「胃が痛むと下剤をかけるかわりに弓の矢を 2 パルモ [約 50cm] あるいはそれ以上も咽喉から奥へと呑み込む」⁶⁷といったピガフェッタの驚異譚と結びつきながら巨人としてのパタゴニア人表象が広まっていく。16 世紀末に弓矢を呑み込むパタゴニア人が図像化されているが (図 8)、この他にもパタゴニア人は次々と図像化され、ヨーロッパ人の想像界に確固とした地位を占めていった⁶⁸。

たとえばセバスチャン・カボットの『世界地図』(1544 年)やヘーラルト・デ・ヨーデの『アメリカ地図』(1576 年)には、パタゴニア地方を描いた地図上に巨人のパタゴニア人が挿絵として描かれている (図 9)。またウリッセ・アルドロヴァンディの『怪物



図8 テオドール・ド・ブリ作『マゼラン海峡に行くマゼラン』16世紀末（左端に弓矢を呑み込むパタゴニア人が描かれている）増田義郎『大航海時代』、131頁参照。



図9 ヘーラルト・デ・ヨーデ『アメリカ地図』（アントワープ、1576年）Surekha Davies, "Monstrous ontology and environmental thinking", p.168.



図10 「アメリカの巨人たち」ウリッセ・アルドロヴァンディの『怪物誌』（1642年）Surekha Davies, "Monstrous ontology and environmental thinking", p.169.

誌』（1642年）には「アメリカの巨人たち Gigantes Americae」のキャプションのもと、デ・ヨーデの地図の挿絵を元にした三体の巨人の図像が掲載されている（図10）⁶⁹。デ・ヨーデの地図中の挿絵には、一般的な背丈の一人のインディオを画面向かって左端に配し、その右側に三体の大人の巨人と一体の子供の巨人が描かれており、パタゴニア人の巨人が遺伝性のものであることが示唆されている⁷⁰。巨人像の下に付されているラテン語の説明文は次のように語る。

ここには、身長が9ペスもしくは10ペス [2.3～3m]、あるいはそれ以上のパタゴネスと呼ばれる巨人族が住んでいる。彼らは様々な植物から抽出した多様な色彩で自

分の顔を彩色している⁷¹。

また、1617年からライデン大学の解剖学教授であったオットー・ファン・ヒュールネが、大学当局に対して解剖学教室に東西インド諸島から人体の骨格を入手するように要望している。彼が特に手に入れることを望んだのはパタゴニア地方の巨人やアマゾン地方に棲むと信じられていたブレミアエ（無頭人種）の人体骨格であった⁷²。パタゴニア地方に巨人が現実に棲息していると信じられていた証左である。山中が論考で言及しているように、「骨」は巨人の実在を示す「物質」として重要であった。

さて、以上のように16・17世紀を通して広く受容されていた「パタゴニア人巨人説」だが、18世紀に入ると変化の兆しが現われ、同世紀の後半にはこの説は否定されることになった。本稿の冒頭で言及したように、18世紀は啓蒙主義の時代であり、理性と合理主義的な思考が重視され、迷信や伝統的な偏見の打破が目指された。ここであらためて『百科全書』の「巨人」の項目を見てみることにしよう。ド・ジョクールは、古代以来、ヨーロッパ社会において巨人として認識されてきたネフィリム、バジャンの王オグ、ゴリアテ、キュクロプスなどの例を挙げたあと次のように述べている。これらは本論集で幾度も言及されている巨人である。

しかしながら十分に哲学的ないくらかの現代人は（・・・）マゼランの地域付近のチリのはずれに身長が巨大な（gigantesque）人種が存在すると報告している数人の航海者たちの話に気持ちを動かされずにはいられない。それはパタゴニア人（Patagous）である⁷³。

この引用文の少しあとでパタゴニア人の身長は9～10ピエ、すなわち2.9～3.2mと言及されている。

つづけてド・ジョクールはこう述べる。

それについてはいくら疑っても疑い過ぎることはない。結局のところ、それは全くありそうもないことである⁷⁴。

巨人の実在に対する極めて懐疑的な見解と言えるであろう。そしてこの見解は現代医学における巨人症に関する知見と通底する思想に裏打ちされていた。ド・ジョクールは次のように言う。

経験が我々に教えるには、時折、我らのなかに巨人、つまり7～8ピエ [2.3～2.6m] の人間がいる場合、彼らは一般に身体に障害を持ち、病気で、最も普通の働

きに適さないのだ。結局のところ、マゼランの地域のそれらの巨人が存在するとしても、それは時機がくればわかることだ⁷⁵。

このように巨人の実在に対する懐疑的な見解が流布し始めるとともに、パタゴニアを訪れた航海者が当地における巨人の実在を否定する見解を公表し、遂に「パタゴニア人巨人説」は終焉を迎えることになる。ブーガンヴィルは1766年から69年にかけて南太平洋の島々を探検したフランス人の航海者だが、その著『1766、1767、1768 および 1769 年の国王のフリゲート艦「ラ・ブドゥーズ」と改造輸送艦「レトワール」による世界周航記』（1771年）の中で1767年にパタゴニア人と遭遇したことにふれて、次のような記述を残した。

これらの男たちは背が高く、我々が会った人々のうち、5ピエ5プースないし6プース以下の者は1人もいなかったし、5ピエ9プースから10プースを超える者もいなかった⁷⁶。

つまり、約176～178cm以下の身長の子はいなかったが、186～189cm以上の者もいなかったのである。2mを超えるような巨人は存在しないのだ。

ブーガンヴィルはつづけて述べている。

彼らの身体で巨人を思わせるのは、とびきり広い肩幅、頭の大きさと手足の太さである。彼らは頑丈で栄養状態が良い。筋骨隆々とし、肉は固く締まってよくついている。それは、自然に委ねられ、滋養のある食物に恵まれて、人間のないうる成長を完全に遂げた人なのである。彼らの容貌は、恐ろしげでも、不快でもない。美しい顔立ちの者も何人もいる⁷⁷。

もはやパタゴニア人は巨大な体軀を持つ怪物的な存在ではない。「高貴な野蛮人」の容貌も付与されながら、想像界の住人ではなくなったと言えるであろう。18世紀という時代は、ヨーロッパ世界における「驚異の時代の終焉」でもあったことも想起すべきであろう。

最後に、パタゴニア人の「トポス（立ち位置）」をまとめておこう。第一に、パタゴニア人はヨーロッパ大陸から遠く離れた南アメリカ大陸に棲息する、ヨーロッパ人とは異質で異形の他者的存在としての巨人であった。第二に、パタゴニア人はヨーロッパ人にとって異境の地、驚異の世界、すなわち想像界の特徴を潤沢に含む南アメリカ大陸に棲息しながらも、現実の存在であった。そして第三に、パタゴニア人は近世末以降、すなわち18世紀を経る中で次第に飼いならされ、巨人として表象されることすらなくなってしまうの

である。

5. おわりに

以上、西洋中・近世における巨人表象として聖クリストフォルス、野人、パタゴニア人を取り上げ、それらの巨人が棲息していた「場（トポス）」、「立ち位置」について検討してきた。三者三様にその表象のされ方は異なるが、現実界と想像界にまたがる境界性、ヨーロッパ人にとっての他者性、時代の変遷の中で「飼い慣らされていく」様態に共通性があったことが見てとれよう。

これらの巨人たちの「飼い慣らし」は、ヨーロッパにおいてはとりわけ近世以降に進んでいく。巨人たちはかつて持っていた強烈な聖性や凶暴性、異形性を次第に剥奪され、近代的で合理的な思惟に慣れ親しむ「現代に生きる我々の側」へ回収されていくのである。聖クリストフォルスは日常世界という場におけるささやかな聖人崇敬の対象へ、野人は祝祭という場での出し物へ、パタゴニア人に想定されたような巨人的特徴は医学の場における治療・研究対象へと変化していったのである。この「飼い慣らし」の過程の延長線上に、現代のアニメや漫画に登場する巨人が存在すると言えるのかもしれない。

ヨーロッパの歴史に登場する巨人は、大沼や岡本の論考に見るように、本稿で取り上げた三種に限定されるわけではない。他にも、ダンテの『神曲』「地獄編第31歌」（14世紀初）に登場する巨人たちやラブレの『ガルガンチュア物語』『パンタグリユエル物語』（15世紀末～16世紀中頃）に登場する巨人の主人公などが挙げられよう。

これらの巨人と本稿で取り上げた巨人の関係を含めて本稿で論じられなかった問題は多く残っているが、その探究は今後の課題としたい。

注

- * 本論は、以下の口頭発表を元に執筆した。「西洋中・近世における巨人表象とイマジネール—聖人・野人・パタゴニア人」、オンライン公開シンポジウム「「巨人」の場（トポス）」、同志社大学一神教学際研究センター主催、2021年11月6日。また本論は科学研究費補助金・基盤研究（C）「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承—中東及び古代・近世との関わり」（研究代表者：大沼由布、研究課題番号17K02522）の助成を受けた。
- 1 Louis de Jaucourt, “GÉANT”, *Encyclopédie*, tome septième, 1757, p.536 (Édition Numérique Collaborative et CRitique de l’Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers (1751-1772)), (access:2021/11/21) <http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedie/article/v7-842-0/>
 - 2 Eckart Birnstiel, “Louis de Jaucourt (1704-1779)”, *Musée protestant* (access:2021/11/21) <https://museeprotestant.org/en/notice/louis-de-jaucourt-1704-1779-2>.
 - 3 池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』名古屋大学出版会、2020年、2頁
 - 4 ジャック・ルゴフ『中世の夢』池上俊一訳、名古屋大学出版会、1992年所収、池上俊一「解題」、280–281頁。また、中世史家ミシェル・パストゥローは「歴史家にとって—おそらく中世史家にとってはとりわけ—想像界はつねに現実界の一部をなして、ひとつの現実となっているのである」（M・パストゥロー『ヨーロッパ中世象徴史（新装復刊版）』篠田勝英訳、白水社、2018年、22頁）、「想像界という、現実界のもうひとつの部分」（28頁）と述べている。
 - 5 植田重雄『守護聖者一人になれなかった神々』中央公論社、1991年、4、10–12頁。
 - 6 David Hugh Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints*, Fifth Edition (Oxford: Oxford University Press, 2003), p.105
 - 7 ヤコブス・デ・ウオラギネ『黄金伝説3』前田耕作・西井武訳、人文書院、1986年、13頁。引用あたり、論文の表記を統一するため一部変更させていただいた。
 - 8 同上、13–21頁。
 - 9 ここで引用した2つの奇蹟については、同上、17–18頁を参照。
 - 10 Walter Stephens, *Giants in Those Days-Folklore, Ancient History and Nationalism* (Lincoln & London: University of Nebraska Press, 1989), pp.43–44.
 - 11 エラスムス『痴愚神礼讃』渡辺一夫訳、岩波書店、1954年、111頁。
 - 12 David Hugh Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints*, pp.105–106.
 - 13 Simon Ditchfield, “Thinking with Saints: Sanctity and Society in the Early Modern World”, *Critical Inquiry*, Vol.35, No.3, Spring, 2009, p.560.
 - 14 David Hugh Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints*, p.106.
 - 15 『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1990年。
 - 16 ネフィリムについては、本論集所収の高井、勝又の論考、また Christophe Colera, *Les Nephilim: Une lecture biblique de l’histoire des Géants* (Paris: L’Harmattan, 2020) を参照。
 - 17 東方正教会において犬頭人種として描写される聖クリストフォルスは、必ずしも巨人として表象されるわけではない。Walter Stephens, *Giants in Those Days*, p.44 を参照。

- 18 デイヴィッド・ゴードン・ホワイト 『犬人怪物の神話—西欧、インド、中国文化圏におけるドッグマン伝承』 金利光訳、工作舎、2001年、57–61頁。
- 19 Jennie Friedrich, “Saint Christopher’s Canine Hybrid Body and its Cultural Autocannibalism”, *Preternature: Critical and Historical Studies on the Preternatural*, Volume 6, Number 2, 2017, pp. 194-195.
- 20 John Block Friedman, *The Monstrous Races in medieval Art and Thought*, (Syracuse: Syracuse University Press, 2000), pp.72–75.
- 21 ゴードン・ホワイト、『犬頭怪物の神話』、368頁。
- 22 巨人としての聖クリストフォルスを「我々の巨人」「善きものとしての巨人」「飼い慣らされた巨人」として言及している研究として、Walter Stephens, *Giants in Those Days*, pp.43, 49–50を参照。
- 23 Richard Bernheimer, *Wild Men in the Middle Ages: A study in Art, Sentiment, and Demonology* (Cambridge: Harvard University Press, 1952), p.2.
- 24 Richard Bernheimer, *Wild Men in the Middle Ages*, pp.1–2. リチャード・バーンハイマーのほか、中世の野人を「想像上の生き物 imaginary creature」と表現しているのは、ロヘル・バルトラである。Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass: The Mythic Origins of European Otherness*, translated by Carl T. Berrisford (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1994), p.85.
- 25 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.88; Richard Bernheimer, *Wild Men in the Middle Ages*, p.1.
- 26 ロヘル・バルトラ (大久保教宏訳)「野蛮なる西洋の発見—ある想像上の始的集団の歴史」『iichiko』22、1992年、80頁。バルトラは、Fabio Turato, *La crisi dell’ateneo e l’ideologia del selvaggio nell’Atene del V secolo a.c.*, Wdizioni dell’ateneo & bizzarri, Roma, 1979を引用している。
- 27 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.11. ギガンテスについては大沼の論文を参照。
- 28 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.89; ロヘル・バルトラ「野蛮なる西洋の発見」、20頁。
- 29 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.90; Richard Bernheimer, *Wild Men in the Middle Ages*, p.7.
- 30 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.90.
- 31 伊藤進『森と悪魔—中世・ルネサンスの闇の系譜学』岩波書店、2002年、184–185頁。
- 32 伊藤進『森と悪魔』、176–177頁。
- 33 伊藤進『森と悪魔』、177–178頁。
- 34 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.112.
- 35 伊藤進『森と悪魔』、189頁。伝カリステネス (橋本隆夫訳)『アレクサンドロス大王物語』国文社、2000年、140頁からの引用。
- 36 伊藤進『森と悪魔』、189–190頁。スペンサー (和田勇一監修)『妖精の女王』文理、1974 (1969)年、579頁からの引用。

- 37 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, pp.100–106.
- 38 伊藤進『森と悪魔』、199 頁。Hayden White, “The Forms of Wildness: Archaeology of an Idea”, in H. White, *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism* (Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 1978), pp.150–182.
- 39 Henricus Institoris, O.P. & Jacobus Sprenger, O.P. *Malleus Maleficarum*, edited and translated by Christopher S. Mackay, Volume I, The Latin Text and Introduction (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), p.247 (23B).
- 40 Institoris & Sprenger, *Malleus Maleficarum*, p.248 (23C).
- 41 Institoris & Sprenger, *Malleus Maleficarum*, p.248 (23D). 『聖書』(新共同訳)では「イザヤ書」(13:21)の同箇所は、「駝鳥が住み、山羊の魔神が踊る」と訳されているが、ラテン語 *pilosus* は「毛深い」が原義である。
- 42 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.120.
- 43 ヴィルヘーリヒ・ポイカート『中世後期のドイツ民間信仰—伝説の歴史民俗学』中山けい子訳、三元社、2014年、65、73、86–87、93頁。
- 44 Institoris & Sprenger, *Malleus Maleficarum*, pp.248 (23C–23D).
- 45 高井によれば、ヘブライ語聖書でレファイムは巨人として「悪者化」されており、その一例が「イザヤ書」(14:12)における「明けの明星、暁の子」である。これはキリスト教神学では悪魔の頭目・墮天使ルシファーを意味する。巨人と悪魔の関係については、大沼、岡本の論考も言及しており、キリスト教世界の巨人を考える上で重要な研究トピックだと思われる。
- 46 池上俊一『森と川—歴史を潤す自然の恵み』刀水書房、2010年、106頁。
- 47 池上俊一『森と川』、104-108、112頁。
- 48 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, pp.108, 110.
- 49 ロヘル・バルトラ「野蛮なる西洋の発見」、9頁。
- 50 Roger Bartra, *The Artificial Savage: Modern Myths of the Wild Man*, translated by Christopher Follett (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1997), pp.38–39.
- 51 ポイカート『中世後期のドイツ民間信仰』、114–115頁。
- 52 Roger Bartra, *Wild Men in the Looking Glass*, p.130.
- 53 ラス・カサス『コロンブス航海誌』林屋永吉訳、岩波書店、1977年、79–80頁。
- 54 大航海時代における南アメリカ大陸の巨人表象に関する先駆的な研究として、長尾直洋の一連の論文がある。長尾直洋「ヨーロッパ世界による他者表象に関する一考察—大航海時代における巨人族表象について」『REHK』14、2006年、49–66頁；同「アメリカ・ヴェスプッチと南米先住民表象—他者表象の多元性に関する一考察」『イスパニア図書』10、2007年、102–114頁；同「図像と他者表象—大航海時代における図像資料に関する一考察」『言語と文化』1、2007年、103–117頁；同「マガリヤインス一行の世界周航とパタゴニア先住民(フエギアン)表象」『言語と文化』2、2008年、137–150頁；同「ドレイク世界周航における巨人表象に関する一考察」『REHK』16、2016年、97–116頁を参照のこと。
- 55 「アメリカ・ヴェスプッチの書簡集」長南実訳・増田義郎注、『大航海時代叢書1 コロンブス、アメリカ、ガマ、バルボア、マゼラン 航海の記録』岩波書店、1965年、296頁。

- 56 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」、296 頁。
- 57 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」、297 頁。
- 58 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」、297 頁。
- 59 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」、297 頁。
- 60 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」、298 頁。
- 61 ピガフェッタ「最初の世界周航」、『マゼラン 最初の世界一周航海』、長南実訳、岩波書店、2011 年、35 頁。
- 62 ピガフェッタ「最初の世界周航」、36 頁。
- 63 増田義郎『大航海の世界Ⅲ マゼラン』原書房、1993 年、136 頁。ピガフェッタ「最初の世界周航」、339 頁。増田義郎『大航海時代』（ビジュアル版世界の歴史 13）講談社、1984 年、131-134 頁も参照。
- 64 ピガフェッタ「最初の世界周航」、339 頁。
- 65 ピガフェッタ「最初の世界周航」、43 頁。
- 66 Surekha Davies, “Monstrous ontology and environmental thinking: Patagonia’s giants”, in Surekha Davies, *Renaissance Ethnography and the Invention of the Human* (Cambridge: Cambridge University Press, 2016), pp.154-155.
- 67 ピガフェッタ「最初の世界周航」、42 頁。
- 68 巨人の図像化は、その図像を見る人々に巨人イメージを視覚的に印象づけ、巨人表象を定着させる上で重要な働きを持つと思われる。ヨーロッパ・キリスト教文化圏の事例については本稿でいくつか紹介したが、イスラーム圏の事例については林の論考が示唆に富む。
- 69 Surekha Davies, “Monstrous ontology and environmental thinking”, pp.165-169.
- 70 Surekha Davies, “Monstrous ontology and environmental thinking”, p.167.
- 71 Surekha Davies, “Monstrous ontology and environmental thinking”, pp.167-168.
- 72 フロリケ・エグモント、ピーター・メイスン『マンモスとネズミーミクロ歴史学と形態学』（小林正巳訳）、青土社、1999 年、210、212 頁。
- 73 Louis de Jaucourt, “GÉANT”, *Encyclopédie*, tome septième, 1757, pp.537-538.
- 74 Louis de Jaucourt, “GÉANT”, *Encyclopédie*, tome septième, 1757, p.538.
- 75 Louis de Jaucourt, “GÉANT”, *Encyclopédie*, tome septième, 1757, p.538.
- 76 ブーガンヴィル『世界周航記 17・18 世紀大旅行記叢書 2』山本淳一訳、岩波書店、1990 年、131 頁。
- 77 ブーガンヴィル『世界周航記 17・18 世紀大旅行記叢書 2』、131 頁。